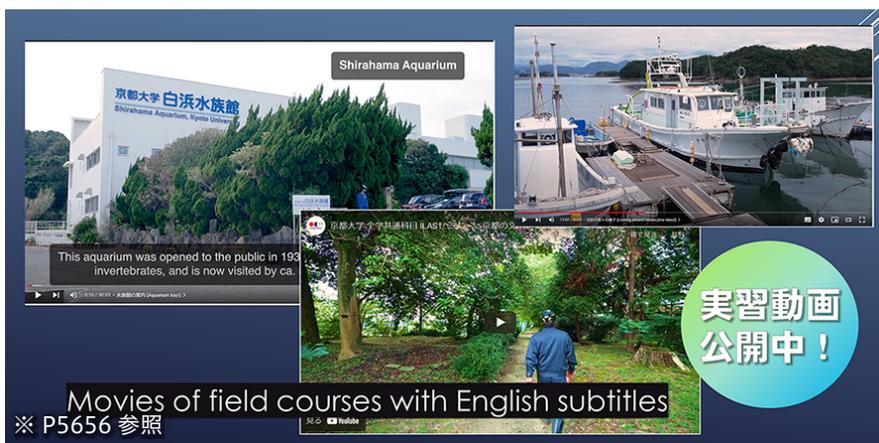


京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5654 参照



※ P5656 参照

実習動画
公開中!

2022.3
No. 761

目次

[大学の動き]

- 京都大学総長特別栄誉賞の授賞式を挙 行 5654

[部局の動き]

- JASTIP シンポジウム 2021「STI コーディネーションにおける日ASEANの共創的メカニズム」を開催 5655
- 京都大学のフィールド実習をオンライン体験できる映像教材を公開 5656

[寸言]

- 京都と京大のDNA 植木 宣隆 5657

[随想]

- 研究と道草 名誉教授 金田 章裕 5658

[洛書]

- 感じ方の個人差をとらえてよろずのころを視る 5659
高橋 雄介

[探訪]

- 桂図書館
～広報課員が行く～ 5660

[話題]

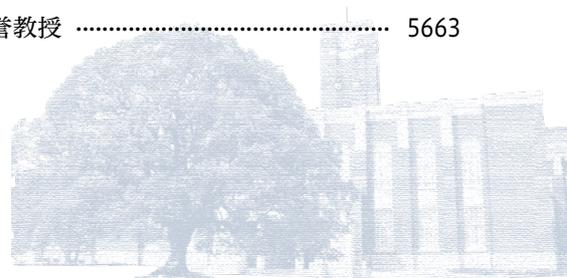
- オープンホスピタル 2021 を開催 5662

[訃報]

- 中村 泰人 名誉教授 5663



京都大学



京都大学総長特別栄誉賞の授賞式を挙行

各種スポーツ等で国際的に特に優秀な成績を取めた卒業生等を表彰することにより、本学の一層の発展を期するため「京都大学総長特別栄誉賞」を2021年11月に創設しました。

昨年夏に開催された第32回オリンピック競技大会(2020/東京)男子20KM競歩において、見事銅メダルを獲得された山西利和氏が、栄えある第1号受賞者として選出されました。

表彰式では、湊 長博 総長から表彰状(盾)と目録が授与されました。その後の懇談の場では山西氏が、競歩に取り組まれたきっかけや、競歩競技の特徴、日頃の練習の様子などについて語られました。大学時代の練習についての質問では、高校時代の恩師を訪ねて大学から深草までの約8kmを練習も兼ねて歩いたというエピソードなども披露されました。

また、山西氏が獲得された銅メダルが披露され、メダルの柄などについて山西氏から説明があった後、手に取った出席者からは一様に「重みがある」との声が上がりました。

最後に、山西氏が「次のオリンピックもメダル獲得を目指して日々練習に励むので、これからも応援よろしくお願いします。」と述べられ、出席者からは激励とさらなる活躍の期待を込めて盛大に拍手が送られました。



銅メダルを披露する山西氏



表彰状(盾)と目録が授与された山西氏

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)



JASTIP シンポジウム 2021「STI コーディネーションにおける日 ASEAN の共創的メカニズム」を開催

「日ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点-持続可能開発研究の推進」(JASTIP) は、JASTIP シンポジウム 2021 「STI コーディネーションにおける日ASEAN の共創的メカニズム」を12月13日(木)、14日(金)にオンラインで開催し、延べ14カ国から232名の出席がありました。

JASTIPは、ASEAN 科学技術イノベーション委員会 (COSTI) 公認のもと、共同研究を発掘・調整する研究支援人材 (STI Coordinator) を育成し、ネットワークを強化することを目指しています。

初日は、COSTI 議長である Sirirung Songsivilai タイ高等教育科学研究イノベーション省

事務次官と千葉 明 ASEAN 大使の開会挨拶で始まりました。JASTIP の代表である河野泰之 副学長・東南アジア地域研究研究所教授の司会のもと、久永幸博 文部科学省科学技術・学術政策局参事官(国際戦略担当) 付企画官ら各国の科学技術や国際協力に関する省庁・大学の有識者により、STI Coordinator 育成の成果



1日目の来賓およびパネリスト

と今後の展開について議論されました。

2日目は、縄田栄治 ASEAN 拠点所長等の挨拶に続き、園部太郎 学術研究支援室リサーチアドミニストレーター (URA) と斎藤知里 URA が進行役を務め、各国を代表する若手研究者らと意見交換が行われました。



2日目の集合写真



縄田拠点所長

会議アジェンダは本学URAがマラヤ大学やカンボジア科学技術イノベーション省、若手研究者ネットワークとともに企画し設定しました。今後も定期的な勉強会を予定しており、日ASEAN間での研究支援人材の育成を牽引していくことを目指しています。

(学術研究支援室)

[目次に戻る ↗](#)



京都大学のフィールド実習をオンライン体験できる映像教材を公開

フィールド科学教育研究センターは、京都大学の特色の一つであるフィールドワークをオンラインで体験できる映像教材を開発し、2月15日(火)に京都大学オープンコースウェア(OCW)ウェブページで公開しました。

本映像では、瀬戸臨海実験所(和歌山県西牟婁郡白浜町)や北白川試験地(京都大学吉田キャンパス北部構内)での学生実習を参加者の目線で撮影し、臨場感ある現地の雰囲気味わいながら実習を体感できます。コロナ禍においてフィールド実習を継続するため、さまざまな学部の学生を対象とする入門、体験的な学生実習を撮影したのですが、大学の学生実習に興味のある高校生や学び直しの機会を求めている社会人など幅広い方々に、京都大学での教育研究活動に関心を持ってもらうため、一般公開することになりました。

教員や技術職員が日本語で解説している映像には、英語テロップが入っており、京都大学に留学を希望する外国人学生にもご覧いただけます。

【関連リンク】

フィールド科学教育研究センター 学生実習ページ

<https://u.kyoto-u.jp/fc1>

京都大学OCWページ

ILASセミナー：京都の文化を支える森林-地域の智慧と生態学的知見

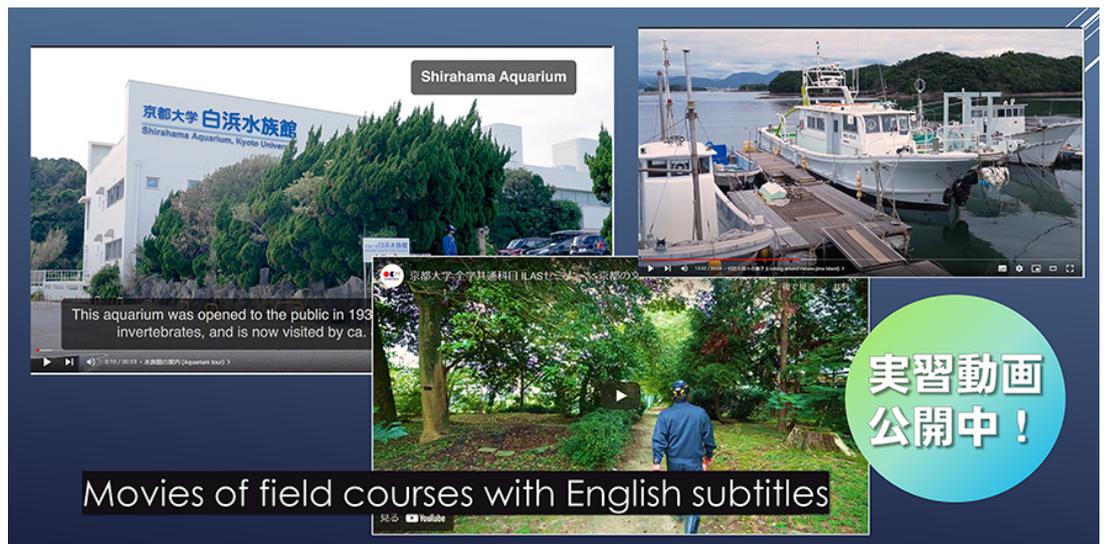
<https://ocw.kyoto-u.ac.jp/course/1061/>

京都大学白浜水族館

<https://ocw.kyoto-u.ac.jp/course/1060/>

臨海実習第1部(瀬戸臨海実験所 学生実習)

<https://ocw.kyoto-u.ac.jp/course/1059/>



公開している動画

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

京都と京大の DNA

植木 宣隆



山紫水明の千年の都であり、高い水準の文化と歴史に包まれた京都と、この地で120余年歩んできた京都大学は、独自の価値観やDNAを持っています。京都で育った人は普遍的なものを大切に、長いスパンや世界的な視点で物事を見る傾向があるように感じます。何事も小手先だけでは継続できないことを知っているからでしょう。長く続きグローバル展開をしている京都企業が多いのも、こうしたDNAゆえかもしれません。

京都大学もこのDNAを礎に自由や個性を大切に、野性的ながら目先のことや部分にとらわれない、全体を見渡せる視野を持った人材を数多く育ててきました。京都で生まれ育ち京都大学で学んだ私も、多少なりともそうしたDNAを受け継いでいるのかもしれません。長らく出版不況といわれる業界に身を置いて、どうにか今日までやってこられたのも、目に見えない恩恵に支えられていたからだと感じています。

偶然のなせるわざかと思いますが、もともと京都発のベンチャーだった京セラの創業者・稲盛和夫氏にロングセラー『生き方』を書いていただき、同じく日本電産の創業者・永守重信氏に『成しとげる力』を上梓していただいたのは、不思議なご縁と感謝しています。

経営者となつてからは「海外版權」のビジネスにも注力しました。人種や国が違っても、人間の心や体に大きな違いはない。日本のアニメやコミックが海外で人気なのは、その技法や筋書きが優れているばかりではなく、奥に折りたたまれた日本のスピリットが共感されているため、われわれが手掛ける活字主体の読み物も受け入れられるはず。

そんな自らの信念に基づいて展開してきた結果、「こんまりさん」こと近藤麻理恵著『人生がときめく片付けの魔法』が世界で1350万部という大ヒットになったり、川口俊和著の小説『コーヒーが冷めないうちに』がロックダウン下のイタリアや英米でベストセラーになったりという幸運にも恵まれてきました。

出版に限らず、音楽にせよゲームにせよソフト産業は、多くの作品・商品が生まれる中で、ごく一部だけがヒットするという宿命を背負っています。厳しい現実には振り回されるのではなく、それを乗り越えていく胆力とレジリエンスがあるか、長期的・普遍的な視点で未来を見据えられるか、経営者は日々、市場から問いかけられています。

私事ですが私自身、高2のときに父を亡くしたために、京大在学中はいくつもの奨学金を頂戴し、そのおかげで社会人になれたとの思いがあります。会社としても個人としても、少しでも社会に恩返しのできるようなありかたを目指したいものです。

(うえき のぶたか 株式会社サンマーク出版代表取締役社長、昭和51年文学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

研究と道草

名誉教授 金田 章裕



研究者として私は、きわめて道草の多い生活を送ってきたと思う。道草は目的に向かう道程の途中でも生じるが、散歩道ではとりわけしばしば発生する。散歩道そのものが必ずしも目的地を目指すものではないので、散歩道をたどること自体が道草に他ならないかもしれない。

研究の過程は、目的地に向かう道程になぞらえられるであろう。研究対象によってスタイルは異なるであろうが、私の専門は歴史地理学であったので、通常まず研究目的を設定して、研究室や図書館において既往の論文の整理や再検討を進めるとともに、関連の地理・歴史・考古関係の多様な資料を広く検索した。さらにフィールドに出かけて現地を確認し、そこでも関連の資料を探訪するのが常道であった。

一応は研究計画を立てたが、途中でしばしば変更を余儀なくされた。しかも、実際の資料の存在に合わせて計画を変更した方が、よい結果が得られた場合が多かった。その過程において、毎年一編の論文執筆を心掛けていたが、この道程を経て目的に到達するのに10年間程度を必要とした。そのころには雑誌投稿論文も蓄積されていたので、まとめて論文集を刊行してきた。

私はもともと、日本古代・中世の歴史地理学を研究の出発点としていたが、やがてオーストラリアへもフィールドを拡張し、さらに北米の旧英領植民地や英本国の英語圏諸国に及んだ。この対象についても類似の研究計画を立て実施したので、結果的に年二編の論文執筆を自身に課すこととなった。これらの歴史地理学の研究の中から、「景観史」と自ら称した観点が生成したことも、研究目的を明確にする役に立った。

これが私の研究道程であったとすれば、一方で早くから、散歩や道草に相当すると自覚しながら、依頼された仕事にも応じてきた。多くが歴史地理学の概説書・シリーズ本や、自治体史などへの寄稿であった。しばしば、時間的にかなり無理を余儀なくされた調査・執筆もあったが、中には自分の研究目的に設定しても面白そうな魅力的なテーマもあって、道草に留めるのに却って努力を要した場合もあった。

この中で、文化財行政にかかわる中で生じた「文化的景観」については、ついに道草に留まらなかった。自ら標榜した景観史にかかわる、その要素の文化財としての側面でもあったからである。出発は散歩道のつもりであったが、研究とは言えないものの、次第に類似の方向を模索することとなった。

やがて年齢を重ねるとともに、本来の研究以外の仕事が増大し、京都大学退職後は、ほとんど道草(研究以外)ばかりの生活となっている。役職の執務室はあっても研究室がなくなったせいかもしれないし、学生時代から鉛筆やペンが手段であったのに、それが何時からかパソコンに代わったせいかもしれない。

今や、どこが研究目的へたどり着く道筋で、どこが散歩道かの区別もつかないが、文章を書くスピードは加速しているかもしれない。出版する本も研究書ではなく、一般書ばかりである。

(きんだ あきひろ, 平成20年退職, 元大学院文学研究科教授, 専門は人文地理学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

感じ方の個人差をとらえて
よろずのころを視る

高橋 雄介



大学で受けた英語の必修授業のひとつは、『ハムレット』を原典で読むという、私にとってはハードな内容でした。語学もさることながら、その複雑な心情描写が大変勉強になりました。その『ハムレット』の第2幕第2場です。ハムレットは、自分の心情を詮索するよりの依頼を受けて訪れた元学友のローゼンクランツたちとの会話の中で以下のように述べています。“*Why, then 'tis none to you, for there is nothing either good or bad but thinking makes it so. To me it is a prison.* (そうか、それなら、君たちにとっては牢獄ではないのだよ。物事には善いも悪いもなく、考え方ひとつで決まる。私にとっては、ここは牢獄だ。)” 物語の文脈と無関係にはなりますが、この一節を題材に、個人差の心理学に関する2つのことについて考えてみたいと思います。

ひとつめは、あなたと私は違う(には留まらない)という点です。私が専門とする教育心理学・発達心理学・行動遺伝学はいずれも個人差を取り扱う学問です。或る変数にばらつきが存在する現象を誤差と見なすか個人差と見なすかはその変数の特徴のみでは定まらず、その値をどのような視点から覗くのかに依拠します。個人差は社会的には多様性であり統計学的には分散です。すなわち、個人差を視ることは個人に関心があるというよりもその集団に興味があることにほかなりません。ハムレットとローゼンクランツは別の人物ですから異なるのは自明です。個人差の心理学では、敢えて平均を捨象し、その集団はどのようにばらつくのか、そのばらつきはどのように説明されるのかを考察します。

ふたつめは、物事はその人の考え方ひとつかもしれないという点です。Keller *et al.* (2012)は、米国CDCが実施した行政調査データを分析しました。過去1年間にどれくらいストレスがあったかを尋ね、さらにそのストレスが自らの健康にどの程度影響を与えていると感じるかを尋ねています。ストレスはなく、身体への影響があるとも思っていない群と比較して、ストレスが多く、そのストレスが健康に影響を強く与えていると感じる群は死亡リスクが43%高く、逆にストレスは多いもののそれは健康には影響していないと感じる群の死亡リスクは17%低いという結果でした。これらの結果は、ストレスが健康の敵なのではなく、ストレスを敵だと感じるものが真の敵であることを示唆するものであり、ハムレットの云う通り、その状況の善し悪しは主観的な感じ方ひとつで大きく左右されるのかもしれません。

英国ロマン派の詩人コールリッジは、シェイクスピアを評して、よろずのころをもつと称賛しました。複雑な人間社会の織り成すよろずのころの端緒をつかむことのできるような研究を目指してこれからも邁進したいと考えております。

(たかはし ゆうすけ、大学院教育学研究科准教授、
専門は教育心理学・発達心理学・行動遺伝学)

[目次に戻る ↗](#)

探訪

このコーナーでは、職員が本学の研究施設等に実際に足を運び、現場での取り組みや職員が感じたことをレポート形式で不定期にお伝えしていきます。

桂図書館 ～広報課員が行く～

桂キャンパスの中心に位置するBクラスターに、2020年4月に誕生した桂図書館。従来の図書館機能に加え、映像コンテンツの撮影・編集を支援する本格的なスタジオやメディアクリエーションルームなど最新鋭の設備も併せ持つ。エリア連携図書館としての全学図書館機能と工学研究科の研究活動を支援する専門図書館機能を有する最新の図書館とは一体どのような施設なのか。2022年2月初旬に訪れ、桂地区(工学研究科) 事務部総務課の原竹留美 課長補佐、助光和宏 専門職員、奥平千秋 利用支援掛長に案内してもらった。

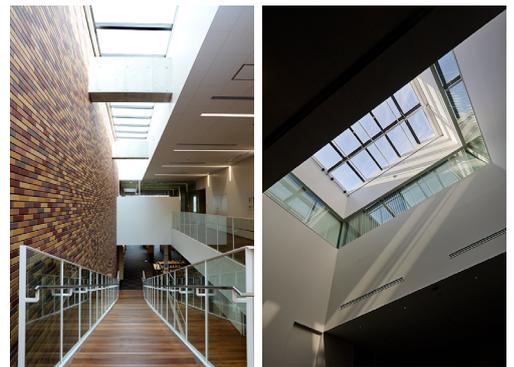


桂図書館

桂図書館は地上2階、地下2階(書庫)の4階構造。レンガ壁を基調に、東側は壁一面をガラスウォールとした外観が印象的だ。1階と2階にそれぞれ入口が設けられ、2階の正面玄関を入ると、右手にカウンター、左手には1階へと繋がるゆるやかな階段がある。階段の真上に設けられたトップライト(天窗)からは自然光が入り、明るさと開放感を演出する。階段を降り、書架を抜けると閲覧室がある。吹抜け天井で、壁一面のガラスウォールからは桂御陵の竹林越しに京都市内が一望できる。ガラスウォール前にはソファが置かれ、利用者の憩いの場になっているという。「天気の良い日にはテラスでのんびり読書も楽しめますよ」と、奥平掛長が教えてくれた。

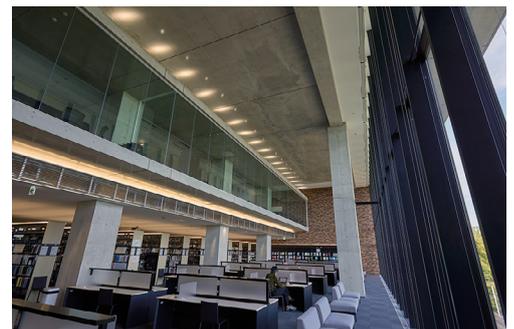
建築デザインを監修したのは岸 和郎 名誉教授。台地という立地を活かし、室内からでも景観を楽しめるように配慮されている。トップライトやガラスウォールなど桂図書館の随所に岸名誉教授のテイストが感じられるという。什器類の監修は平田晃久 工学研究科教授が担当した。桂図書館の模型を作り、「学生や教職員とともに構想を重ね、館内の空間を作り上げてきました」と、原竹課長補佐は話す。

幅広い研究支援サービスにも力を入れる。学内外の研究者の交流促進を目的にオープンラボやリサーチcommonsといった対話可能なオープンスペースを設置したほか、本格的なスタジオを併設したメディアクリエーションルーム

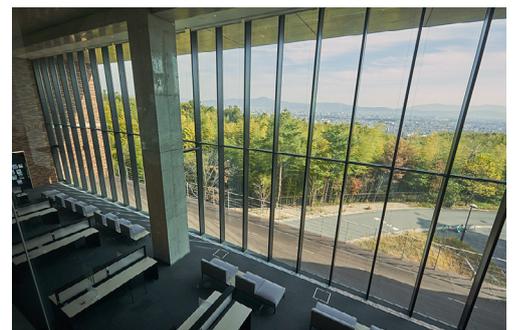


正面玄関前の階段とトップライト

館内の中央にもトップライトがある



1階閲覧室



2階から見た館内と眺望

探訪

などもある。助光専門職員は「最新機材で講義動画の撮影や編集などを支援します」と言う。

「世界最先端の高度で創造的な研究を推し進めるため、『グローバルな情報収集・発信機能』を発揮できる図書館を目指しています」。桂図書館のコンセプトについて、原竹課長補佐はこう話す。桂図書館の設置は、2003年6月の桂キャンパス移転開始以前から計画されていた。計画段階から新たな図書館として、従来の図書館機能に加え、研究支援や情報発信といった役割を担うことが期待されていたという。概算要求の結果、2016年12月に建設が決定。桂キャンパスに点在していた工学の地球系、建築系、物理系、電気系および化学系の5図書室が集約され、2020年4月に開館に至った。

開館までには、これらの桂5系図書室、吉田地区の5系図書室や附属図書館からの資料の移転作業が行われた。2017年から約3年間かけて実施され、現在33万冊以上の資料が集約されているという。資料の管理には、学内の図書館・室では初の試みとなるICタグが導入された。従来のバーコードのように資料を1冊ずつ読み取る必要がなく、蔵書管理や貸出・返却手続きの迅速化につながったという。

桂図書館の特色ある試みに、工学研究科の研究成果や将来的に事業化などが期待される研究シーズの情報発信を積極的に担っていることが挙げられる。「桂の庭」と銘打ったプロジェクトでは、ウェブサイトや館内での展示を通して、さまざまな研究シーズを社会に向けて発信する。

ほかにも、館内では荷物などを自動で運ぶロボットの実験走行やレーザー光を使ったセンサー「LIDAR(ライダー)」による人の密集状態を検出する実証実験なども行われており、図書館が「実験場」として活用されていることも興味深い。

今後は、研究データの管理や保存に対する積極的な支援も行っていくという。近年、研究成果発表だけでなく、研究データのアーカイブ化はオープンデータ、オープンサイエンスの観点からも重要視されており、研究者から図書館に相談が寄せられることもあるそうだ。目録をつけたり、タグをつけたりするといったこれまでの図書館業務の知見を活かし、URAやデータを専門とする研究者と協働し具体的な活動を進めていく。

原竹課長補佐は「桂キャンパスそして工学研究科に必要なとされる図書館でありたい。『今、図書館として何ができるのか』を常に前向きに考え、学生や研究者のニーズに応えていきたい」と意気込みを語る。工学、ひいては全学の研究活動の未来を支える新たな「場」を目指し、桂図書館の進化は続く。

【関連リンク】

桂図書館 <https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja>

桂の庭 <https://seeds.t.kyoto-u.ac.jp/>



本格的な機材が並ぶスタジオ



「桂の庭」館内の展示

(総務部 (広報課 家城健太・吉田滯))

[目次に戻る ↗](#)

話題

オープンホスピタル 2021 を開催

医学部附属病院では、11月1日(月)から12月31日(金)まで「京大病院オープンホスピタル2021」を開催しました。本オープンホスピタルでは、特設サイトによるオンライン形式とし、全体企画、部門企画などのページを設け、さまざまなコンテンツを用意しました。

全体企画では、同院の特徴などをより知っていただけるよう、病院紹介動画や広報誌を掲載するとともに、株式会社ファミリアと作成した出産記念品や株式会社ロマンライフと共同開発したスイーツなど、幅広い取り組みについて紹介しました。

部門企画では、各部門が日常の業務を紹介するスライドを作成したほか、薬剤部や看護部、疾患栄養治療部が、日頃は見られないエリアでの業務の様子などを動画で公開しました。また、就職希望者に向けた企画として、看護部では就職相談会を実施し、放射線部、遺伝子診療部、事務部では就職希望者向けのスライドや動画を掲載しました。

イベント期間中、トップページには25,000回以上のアクセスがあり、部門企画のページにも最大で6,000回以上のアクセスがありました。医学部附属病院では、今後もオープンホスピタルなどの取り組みを通して、実際に現場で働く職員が自ら同院の魅力を伝えられるよう努めていきます。



オープンホスピタル特設サイト



ごあいさつ
副院長 宮本 孝 / 看護部長 井川 麻子



京大病院紹介動画
For the patient ~全ては患者さんのために~



病院紹介冊子
京大病院のご案内 / 京大病院広報



特別企画
京大病院の取り組み紹介

全体企画



薬剤部

部署紹介

●薬剤部

薬剤部は、医薬品の適正使用と安全管理の推進を過して、「薬の力」として「安全で質の高い薬物療法」を提供しています。調剤やモニタリングなどの医薬品供給業務に加え、医薬品情報の提供、ペッドリドでの患者さんへの服薬指導などを進め、薬物治療の有効性・安全性の向上に努めています。



業務紹介PDF

動画企画



活動紹介



薬剤部概要



薬剤部Facebook



Web講演会

部門企画 (薬剤部)

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

訃報

このたび、中村泰人 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

中村 泰人 名誉教授

中村泰人先生は、12月16日に逝去されました。享年86。

先生は、昭和35年3月京都大学工学部建築学科を卒業後、同37年3月同大学院工学研究科修士課程建築専攻を修了、同40年3月同博士課程を単位修得退学されました。同40年4月京都大学工学部助手に採用され、講師、助教授を経て、平成3年4月教授に就任、環境地球工学専攻都市環境安全工学講座を担当されました。その間、昭和55年京都大学工学博士の学位を授与されました。平成11年に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられました。



本学退官後は、平成11年4月から同18年3月まで熊本県立大学環境共生学部教授を務められ、同大学名誉教授の称号を受けられました。その間、同12年9月から同15年3月まで環境共生学部長を務められました。

学外においては、日本学術会議環境工学研究連絡委員会委員、日本建築学会評議員、空気調和衛生工学会理事、日本生気象学会評議員、京都市開発審査会委員、熊本県八代市環境審議会委員などを務められ、学術応用と社会活動に尽力されました。また、平成元年11月に京都で開催された世界で初めての都市気候に関する国際会議「都市気候・計画・建築」の事務局長を務められました。

先生は、建築・都市環境工学分野で先駆的な研究に取り組み、その研究成果は300編以上の学術論文などとして発表されています。生気象学的建築学に関する研究では、昭和50年代にいち早く、生物学的人間と環境とのかかわりに着目されるとともに、日本における都市環境工学・都市気候学の分野を切り開くお一人として活躍され、平成2年に日本建築学会賞（論文）を受賞されました。また、人体の放射受熱量を的確に把握するための研究にも取り組み、環境放射束計を開発されただけでなく、さらに、人体の温熱生理学特性に基づいた熱環境設計の視点から、地球温暖化防止に対して従来の緩和策に加えて注目されている適応策に関する研究と普及にいち早く取り組みました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

京大広報
No.761

令和4年3月25日 発行

発行 京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。

「京大広報」の既刊号は、次のURLでご覧いただけます。

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大力、新輝点。



2022年、京都大学は創立125周年
URL:<https://125th.kyoto-u.ac.jp>